

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：15101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K02706

研究課題名（和文）大学の数量的な「共通知」から分析マインドを涵養する人材育成プラットフォームの開発

研究課題名（英文）Development of the training program to utilize the common knowledge that IR seniors extracted from the analysis example of each university, and to improve the analytical ability of the IR beginner

研究代表者

大野 賢一（ONO, Kenichi）

鳥取大学・学長室・教授

研究者番号：90314608

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：多くのIR初級者が直面する課題（分析目的の不明確等）を解決するため、複数のIR実務経験者が所属大学で行った分析事例から「共通知」を抽出し、IR業務に活用できる共通分析セットを作成した。本セットを基にアンケート調査を実施し、分析経験による傾向の違いや妥当性について検討した結果、当初想定していた厳密な共通知は存在しないものの、調査・設計部分に活用すればIR担当者の能力向上に効果的であることが判明した。また、IRに関する知識・スキルが習得できる講義編と、共通知を分析目的に活用した発想の取得やIR実務経験者と分析ノウハウを共有できる演習編を組み合わせたIR初級者向け研修プログラムを開発した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究によりIR実務経験者が各大学で行った分析事例を収集し、共通知として体系的に整理することができた。本結果は、大学評価コンソーシアムが実施する会員向けアンケートの設問や大学評価・IR担当者集会等のイベントコンテンツとして利用するとともに、コンソーシアムのWebサイトでアンケート結果やイベントの活動結果等を公表することで、我が国の多くのIR担当者に研究成果を提供することができた。また、今回開発したIR初級者向け研修プログラムを通じて、内部質保証やエンロールメント・マネジメントにおけるIR活動の重要性理解、IR担当者同士のネットワーク構築、各大学での実践事例の増加等のIR機能の向上に貢献できた。

研究成果の概要（英文）：For the purpose of solving a problem (unclearness of the analysis purpose) that IR beginners faced, we extracted common knowledge from the analysis example that IR seniors performed at each university and, made the common analysis set that can be utilized in IR work. We carried out questionnaire survey based on this set and examined an answer trend by analytical experiences and validity of the common knowledge. As a result, the common knowledge that we initially assumed did not exist. But it turned out that it was effective for the ability improvement of the IR beginner by inflecting to a research design and research question part. We developed the training program for IR beginners about the common knowledge. The participant can learn knowledge and a skill about IR in the lecture, can acquire the idea that utilized common knowledge for analytical purposes and share the know-how of the analysis with an IR senior in the practice.

研究分野：高等教育

キーワード：IR 共通知 分析スキル 人材育成

1. 研究開始当初の背景

我が国では、大学での教育研究活動等に対する質保証への要望が高まっており、特に教育の内部質保証システムの構築が急務である。そこで重要となるのがエビデンスに基づく質保証であり、各大学で導入が進んでいる IR (Institutional Research) 機能の充実である。IR 部門を設置する大学は近年増加しており、IR 活動として学内データの一元化や関係各署への情報提供、教育研究活動の可視化や客観的な分析、教学マネジメントや大学運営に係る意思決定支援等が期待されている。一方、多くの大学では IR 活動を推進できる専任人材の不在や専門的知識を持たない事務職員だけの配置、IR 業務の不明確等といった運用上の問題が発生しており、IR 部門が組織的に機能しているとは言い難い。

従って、各大学において IR 機能を十分に発揮させるためには、初めて IR 担当になった者(以下「IR 初級者」という)が業務で使いこなせる分析ツールの開発、IR に関する知識・スキルが習得できる場の提供、これらを所属大学で実践する際の分析ノウハウの共有等が必要であると考えた。

2. 研究の目的

本研究メンバーの多くが幹事を務める「大学評価コンソーシアム」が開催する IR 関係のイベントや調査では、IR 初級者が直面する課題として、調査・分析の設計方法がよく分からない、何を分析したらよいか分からないとの意見が多い。そこで、IR 初級者は分析に関する「問い」の立て方が不十分または困難であり、この課題を解決することができれば各大学での IR 業務をスムーズに行うことができるのではとの仮説を立てた。本研究では、複数の IR 実務経験者が所属大学で行った似たような分析事例から共通的事象の抽出や要因・解釈の追記等を行ったものを「共通知」と定義し、この共通知を「問い」(分析目的)に置き換えて活用できる共通分析セットを作成する。また、IR 業務に必要な知識・スキルを短期間で効率良く習得できるように、課題解決に取り組む演習方法の開発や IR 実務経験者と IR 初級者が分析ノウハウを共有できる仕組みづくりの検討を行うとともに、共通知を題材とした研修プログラムを実施する。

3. 研究の方法

共通分析セットの作成では、図 1 に示すように評価・IR の業務プロセスを 4 つのフェーズに分解し、複数の IR 実務経験者が行った分析事例(設計 分析)から分析パターン(使用するデータや変数、共通的事象、分析手法や可視化方法)の抽出及び体系化を行う。共通的事象については、なるべく 1 つの分析事例に対して 2 軸で構成された 1 つのグラフで示すなど、できる限りシンプルな形でリスト化するとともに、各項目をカテゴリー(入試、教務、大学生活、就職・卒業等)で区分することで体系的に整理する。本分析パターンの共通的事象、可視化結果及び結果に対する解釈や要因等を活用すると、共通的事象の結果と自大学の分析結果を比較することが可能となり、他大学と同じ状況にあるのか、それとも本学独自の事象なのかを判定できる。

作成した共通的事象リストが共通知と呼ぶに相応しいレベルに達しているのかを確認するため、大学評価コンソーシアム会員を対象に Web アンケート調査を実施する。共通的事象リストから選別した項目を設問とし、回答方法は各設問に対して選択式と自由記述(任意)を採用する。設問ごとに回答者の分析経験の有無や共通的事象との比較結果を確認するため、「分析経験あり」では 3 択(同様の事象がみられた / 同様の事象はみられなかった / どちらともいえない)、「分析

経験なし」では4択(同様の事象がみられると思う/同様の事象がみられないと思う/どちらともいえないと思う/分からない)、「対象外」では1択(分析対象として業務範囲外)とした。

共通知に関する研修プログラムは、IR 初級者を対象とし、IR の基本や学内各所と良好な関係をもって業務を進めるうえでの課題や注意点等を学ぶことを目的として実施する。データの活用といった観点から、前半はIR に関する知識・スキルが習得できる「講義編」、後半はIR 実務経験者とIR 初級者が分析ノウハウを共有できる「演習編」を組み合わせた構成とする。演習編では、少人数でのグループワーク形式を採用し、各班にはIR 実務経験者をファシリテーターとして配置する。

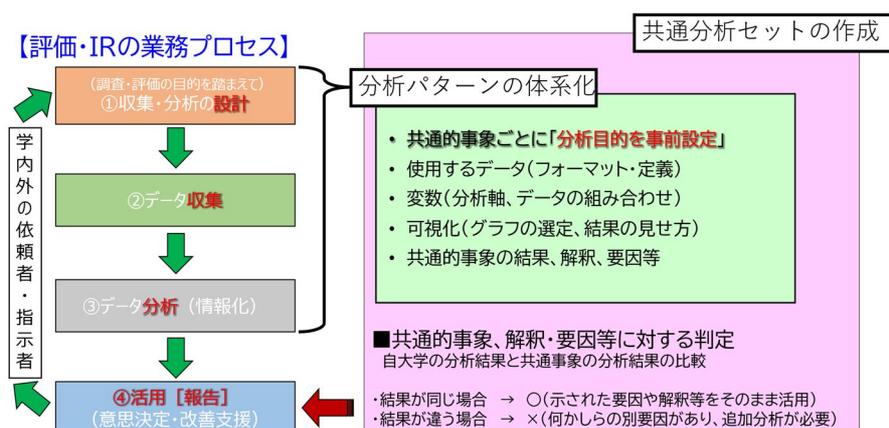


図1 共通知に関する分析セットの概要

4. 研究成果

(1) 共通分析セットは、カテゴリー、使用するデータ(軸1・軸2、凡例)、共通の事象及びその解釈・要因、可視化例等で構成しており、作成した項目は計134個であった。これらに対して、本研究メンバーの3割以上が「共通知と考えられる項目」または「ある条件下なら共通知と考えられる項目」と判定した項目は57個であり、これを共通の事象リストとした。

この共通の事象リストから11個の設問を設定し、大学評価コンソーシアム会員(379機関1,236名:2021年1月7日時点)を対象に「共通知に関するアンケート調査」を実施した(回答者数58名)。共通知の妥当性は、分析経験ありの回答結果だけで算出したものを「狭義」(「同様の事象がみられた」の件数/「分析経験あり」の人数×100)、分析経験ありとなしの回答結果を合わせて算出したものを「広義」(「同様の事象がみられた」の件数+「同様の事象がみられると思う」の件数)/(「分析経験あり+分析経験なし」の人数)×100)とし、狭義の結果が70%以上の場合はどの大学でも類似の事象がみられたと解釈し、妥当性があると判定した。

共通知に関するアンケート結果を狭義と広義でまとめたものが図2であり、設問3~5(GPA関連)、設問7(留学経験とTOEICの関係)及び設問11(科研費獲得金額と論文数の関係)で妥当性ありとなった。これらについては、比較的データが入手しやすく、かつ分析業務として取っ掛かりやすい事例だと考えられる。また、分析経験の有無による狭義と広義の違いについて確認すると、設問3~5ではあまり差がみられないが、設問1(入試成績とTOEICの関係)と設問7では大きな差がみられた。この違いについては、分析経験の無い担当者が事象の傾向を想定できるか否か、分析の前提条件により結果が異なる傾向を示すなどが要因であると考えている。

以上のことを踏まえて、共通知に関して考察すると、表面的には共通的に見える事象が存在するものの、実際分析してみると当初想定していた厳密な共通知は存在しないということが判明

した。当初は作成した分析ツールにより「ソリューション（解）そのもの」が提供できると考えていたが、今回の結果を踏まえて、分析業務において重要なリサーチ・デザインやリサーチ・クエストを設計する際の「発想（考える時の切り口や議論の入り口）」として提示する方が、IR 能力の向上に効果的であるとの結論に至った。

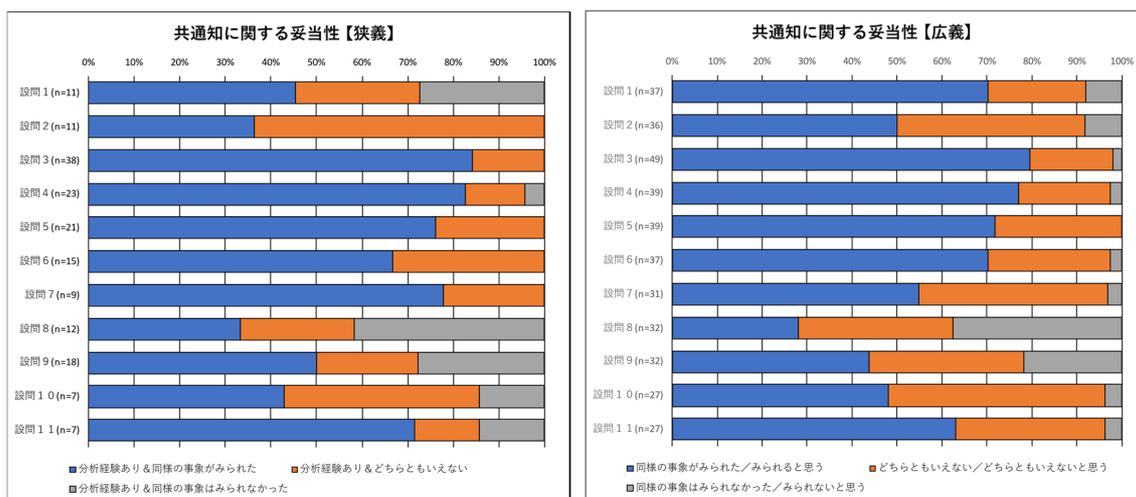


図2 共通知の妥当性（狭義と広義）

(2) 共通知を題材とした研修プログラムは、大学評価コンソーシアムが主催する「継続的改善のための IR/IE セミナー2023」(2023年3月13日開催)の一セッションとして企画し、「IR 初級者セッション2」として実施した(参加者21名)。本セッションの前半(講義編)では、IR 実務経験者による内部質保証やエンrollment・マネジメント(EM)をキーワードにした講義3件を行い、IR との関係性、米国や日本における EM 及び内部質保証を支援する IR の実践事例を公表した。後半(演習編)では、参加者は、1) 参加申込時は、公表された共通知リスト(演習編で使用する題材)から関心が高いテーマ(入試、教務、大学生活、就職・卒業)を選択し、2) 参加申込後は、選択したテーマに含まれる「共通的事象」(2項目)について、自大学での取組状況や分析事例等を収集するとともに、「データ活用から考える IR の業務フローにおける4つの観点」(分析目的や調査設計の決定方法、データ収集、分析結果の原因や要因の特定、分析結果の活用)を使って学内情報を整理し、当日持参することとした。3) 参加当日は、各班において、持ち寄った情報を踏まえた議論や対応策の検討等を行った。班編成は、参加者が事前に選択したテーマや属性情報に基づき行った。

参加者のアンケート結果(回答件数20件)では、業務への活用(肯定的回答率75%)、本研修に対する理解度(肯定的回答率95%)及び満足度(肯定的回答率95%)が非常に高かったこと、自由記述では「グループワークの準備～当日のディスカッションをとおして、自分で考えるという経験をすることができたのは貴重だった」「各大学の事例や悩みを共有できて、とても有意義だった」等のコメントもあったことから、本研修は適切なレベルで実施できたと考えられる。

(3) その他 IR 人材の育成に関して、新型コロナウイルス感染症の影響により研修プログラムを開催できなかった期間においては、大学評価コンソーシアムが策定した評価・IR 人材のためのルーブリックに基づいた「IR(評価)担当者の知識、技能の実態調査」(第3回)に協力した。調査結果については、大学評価・IR 担当者集会2021(オンライン実施)での報告、大学評価コンソーシアム Web サイトでの公表や情報誌「大学評価と IR」への投稿も行った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 鳥田敏行・大野賢一	4. 巻 14
2. 論文標題 特集「IR（評価）担当者の知識、技能の実態調査」概要	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大学評価とIR	6. 最初と最後の頁 5-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 大野賢一	4. 巻 14
2. 論文標題 IR（評価）担当者能力の変化と傾向 - 2018年度調査結果との比較 -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大学評価とIR	6. 最初と最後の頁 14-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 鳥田敏行	4. 巻 14
2. 論文標題 IR（評価）担当者はどのように各能力を涵養しているのか	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大学評価とIR	6. 最初と最後の頁 46-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 鳥田敏行	4. 巻 14
2. 論文標題 2015年度調査における大学評価・IR担当者の能力実態調査について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大学評価とIR	6. 最初と最後の頁 87-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大野賢一・鳶田敏行	4. 巻 14
2. 論文標題 2018年度調査におけるIR担当者能力の現状	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大学評価とIR	6. 最初と最後の頁 102-128
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計9件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 大野賢一
2. 発表標題 IR業務の事始め ~「共通知」という分析セットの開発~
3. 学会等名 大学評価・IR担当者集会2018
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大野賢一、鳶田敏行、岡部康成、田中秀典、藤井都百、小湊卓夫
2. 発表標題 IR が抽出した「共通知」の教学マネジメント分野への適用可能性
3. 学会等名 日本高等教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大野賢一、鳶田敏行、小湊卓夫、藤井都百、田中秀典、岡部康成
2. 発表標題 大学諸活動の分析から得られる共通知の妥当性 - アンケート結果からみられる傾向と課題
3. 学会等名 継続的改善のためのIR/IEセミナー2021
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小湊卓夫
2. 発表標題 大学におけるIR活動とその基本的観点
3. 学会等名 大学評価・IR担当者集会2022
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 鳥田敏行
2. 発表標題 改めてIRとは何か
3. 学会等名 大学評価・IR担当者集会2022
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 鳥田敏行・大野賢一
2. 発表標題 セッション趣旨とねらいと関連する基礎知識
3. 学会等名 大学評価・IR担当者集会2022
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小湊卓夫
2. 発表標題 IR初級概論2
3. 学会等名 継続的改善のためのIR/IEセミナー2023
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 髙田敏行
2. 発表標題 エンロールメント・マネジメントとIR実践
3. 学会等名 継続的改善のためのIR/IEセミナー2023
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 大野賢一
2. 発表標題 演習テーマ（共通知）の概要及びグループワークの説明
3. 学会等名 継続的改善のためのIR/IEセミナー2023
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>大学評価・IR担当者集会2018 分科会2「内部質保証に向けたIRや調査機能の育成」（2018年8月22日開催） https://iir.ibaraki.ac.jp/jcache/index.php?page=acc20180822-R22 大学評価・IR担当者集会2021 IR担当者能力調査結果報告会（2021年8月24日オンライン開催） https://iir.ibaraki.ac.jp/jcache/index.php?page=acc2021 継続的改善のためのIR/IEセミナー2021 IR実務担当者セッション（2021年3月22日オンライン開催） https://iir.ibaraki.ac.jp/jcache/index.php?page=iries2021 大学評価・IR担当者集会2022 https://iir.ibaraki.ac.jp/jcache/index.php?page=acc2022 継続的改善のためのIR/IEセミナー2023 IR初級者セッション2（2023年3月13日開催） https://iir.ibaraki.ac.jp/jcache/index.php?page=iries2023 情報誌「大学評価とIR」第14号（2022年3月30日発行、ISSN 2435-8959） https://iir.ibaraki.ac.jp/jcache/index.php?page=lib014</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	髙田 敏行 (Shimada Toshiyuki) (00400599)	茨城大学・全学教育機構・教授 (12101)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	岡部 康成 (Okabe Yasunari) (10413569)	帯広畜産大学・畜産学部・講師 (10105)	
研究分担者	小湊 卓夫 (Kominato Takuo) (30372535)	九州大学・基幹教育院・准教授 (17102)	
研究分担者	藤井 都百 (Fujii Tomo) (50437092)	九州大学・インスティテューショナル・リサーチ室・准教授 (17102)	
研究分担者	田中 秀典 (Tanaka Hidenori) (50529253)	宮崎大学・農学部・教授 (17601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関